# 王命婚の旦那さまの様子が少しおかしいようです

河津ミネ
illust.
アオイ冬子




Contents


序　章　混乱の中の初夜 ―― 004
第一章　突然の見合い ―― 017
第二章　心の無い化け物 ―― 063
第三章　抱かない理由 ―― 112
第四章　離婚の申し出 ―― 167
終　章　赤い太陽は氷人形の心を溶かす ―― 217
番外編　サラの恥ずかしい告白 ―― 227

# 序章　混乱の中の初夜

「サラ、あなたと結婚できて嬉しい」

氷人形のように美しい男がサラに覆いかぶさると、彼女の燃えるように赤い髪が白いシーツの上に広がった。目の前の男の喜ぶ声を聞きながら、サラは大いに困惑していた。

（一体どうしてこんなことに⁉）

目の前の美しい男はエルナン・ウィズ――サラの夫である。二人は今日の昼間に結婚式を挙げ、教会で結婚を誓い合った仲だ。そしてここは夫婦の寝室で、今は初夜というわけである。つまり、夫のエルナンがサラを押し倒していてもなんらおかしいことはない。

（おかしくはない、が）

おかしいとすれば情熱的な愛の言葉を口にしているはずのエルナンが、まったく感情のこもらない表情の抜け落ちた顔をしていることだ。見下ろす銀の目がサラを鋭くにらむ。

（いくらエルナンが氷人形だからって、こんな顔で嬉しいと言われてもどう反応すればいいか困るな）

氷人形のエルナン――それは人形のように整ったという意味と、氷のように凍てついてまるで表情を変えないという二つの意味を持つ彼の通り名だった。

エルナンは銀色の髪と目、それに透き通るような白い肌を持つ。薄闇の寝室でも、まるで内側から



光を発しているかのように淡く光って見えた。整った顔がわずかな明かりを反射して輝き、まるで神の創った芸術品のごとき美しさである。

一方のサラは日に焼けた健康的な肌色だ。それに結婚前まで騎士をしていたため、女性にしては筋肉質である。長い髪は炎のように赤く、琥珀色の目と合わせて意志の強さをよく表していると評されるが、それだけだ。

銀の目が部屋の明かりを映してゆらりと揺れる。本能的な恐怖を感じてわずかに震えたが、そんな怯えを跳ね返すようにサラはエルナンをにらみ返した。

（そもそも私たちはほぼ初対面なのに、結婚できて嬉しいもなにもないだろうに）

サラとエルナンの婚姻は、王命により急遽結ばれたものだ。結婚式の今日がほぼ初対面で、甘い言葉をかけられる理由がない。

二十四歳のサラは行き遅れに片足をつっこんでいたが、最近の世の中は貴族でも恋愛結婚が主流である。おかげで周りからは結婚を急かされることがなく、本人も結婚をする気がなかった。

そのまま生涯現役騎士を貫く予定でいたのに、なぜか国王直々にエルナンとの結婚を命じられたのである。一介の子爵令嬢のサラに比べ、エルナンの身分は伯爵家の当主だ。サラからこの結婚を断ることはできず――それも王命ならなおさら――結局、驚くべき速さでこの結婚は進められた。

（エルナンにとってもこの結婚は不本意に違いないと思っていたのだが）

二人の婚約が結ばれてからも、すれ違いばかりでエルナンと会うことはなかった。彼は国に二十人といない貴重な魔術士の一人なので任務が忙しいのは仕方ないし、サラはサラで王命婚に反発を覚え

わざわざ会おうとしなかったので同罪だ。責める気はない。
むしろ、結婚式の間ずっと無表情で不機嫌そうなエルナンを見て、彼も被害者だと同情したほどである。
無表情のまま喜びを告げられ困っていると、追い打ちをかけるようにエルナンの声が降ってきた。
「サラ、きれいだ」
「あの、エルナン……？」
「こんな美しい花嫁で俺は幸せものだ」
整った薄い唇からは、心にもない誉め言葉がこぼれ落ちてくる。炎天下でも気にせず鍛えてきたこの身は、お世辞にも美しいと呼べるような代物ではない。肌は日に焼け浅黒く、筋肉に覆われた身体は硬く締まっている。脱げば傷痕だって残っているはずだ。
（こうはっきり嘘だとわかると冷めてしまうな。せめてもう少し幸せそうな顔をしてくれないものか）
そうすれば、サラだって少しぐらいなら騙されてあげることができたかもしれない。しかしはっきり嘘だとわかる誉め言葉に喜んでみせるほどの器用さを、サラは持ち合わせていなかった。
（だが、そうとばかりも言っていられないな）
戸惑う気持ちを素早く切り替えて、サラは今の状況を把握しようと頭を巡らせ始めた。非常時において一瞬の判断の遅れが命取りになるということは、嫌というほど身に染み付いている。これは長年、騎士として過ごしてきた故（ゆえ）の習性といえるだろう。



（つまりエルナンは今夜、私を抱くつもりなのか？）
押し倒されて甘い言葉をかけられているという状況から察するに、そうでなければおかしい。
（ふむ、この結婚は白い結婚ではなかったのか）
そもそもサラは、今夜エルナンは部屋に来ないと思っていた。本人には確認していないけれど——ほとんど会っていなかったので確認する機会もなかったが——望まぬ王命婚の相手と肌を合わせるのは苦痛だろうから、夫婦の営みのない白い結婚になると予想していたのである。
（いや、違う。王命婚だからか）
この結婚が王命だからこそ、気が乗らなくても初夜を完遂する気でいるのだ。
甘い言葉とはちぐはぐな無表情も、エルナンの精一杯の演技だと考えれば納得できる。笑顔までは無理だがせめて言葉だけでも尽くそうと、それらしい雰囲気作りに励んでくれているに違いない。
なんと立派な心がけだろうか。サラは夫となるエルナンの責任感の強さに感心する。
（ふむ……そういう者は嫌いじゃない）
いつも無表情で訳のわからぬ男だと思っていたが、同志のような気持ちが芽生えてくる。それならば……とサラも覚悟を決めた。
「エルナン、よろしく頼みます」
エルナンを見上げ、意気込みを示すように小さくうなずく。
どうせこの結婚は王命で離婚など許されない。せめて体裁だけでも整えようとする夫の覚悟を知れば、妻として応えないわけにはいかなかった。

覚悟が伝わったかどうかはわからないが、エルナンが無表情のまま小さく首を傾けた。銀の髪がさらりと揺れ、美しさに目を奪われる。ふと、サラの胸に小さな不安がよぎった。

（エルナンが女なら誰でもいいと思うタイプだといいが）

目の前の彼は氷人形のように美しく優美だ。こんな美しい男が、サラの筋肉に覆われた肉体に興奮できるものだろうか。

（そこはエルナンにがんばってもらうしかないな）

サラは母親を早くに亡くしたうえ、結婚をするつもりがなかったので閨の知識には乏しかった。もちろん処女だが、長年騎士ばかりの男所帯で過ごし、明け透けで下世話な男女の性にまつわる話なら嫌というほど耳にしている。

（騎士ではなく魔術士だが、エルナンだって同じ男だ。きっとそこまで違いはないだろう）

サラは記憶を探り、口さがない騎士連中の言葉を思い出してみる。

（たしか昼は貞淑で、夜になったら積極的なのがエロい……だったかな？）

男性経験は皆無なので昼の貞淑は守れていると思うが、問題は夜の積極的である。しかし具体的にどうするのが積極的になるのかわからない。

（うーん、そういえば処女のなにも知らない女性を俺色に染めるのを魅力に思うタイプもいたな。無理に積極的になるより、そちらに期待した方が得策か？）

現状を把握して無理があれば臨機応変に対応する。サラは優秀な騎士だったので、柔軟な思考を持っていた。



（これだけ顔がいいのだから女性経験も豊富に違いない。素人がなまじ知ったかぶりするより、ここは経験者に任せるのが最善だろう）

サラは即座に判断して身体の力を抜いた。

「エルナン、あなたに任せてもいいでしょうか？」

「あぁ。じゃあサラ、あなたに触れるよ」

「はい。お願いします」

首筋に触れた手がひんやりと冷たく、サラの全身がかすかにあわだつ。エルナンは見た目だけでなく、体温まで氷人形のようだった。

エルナンは壊れ物に触るような丁寧な手つきで赤い髪を一筋すくうと、柔らかい口づけを落とした。髪に感覚などないはずなのに、ゾクリとむずがゆいような震えが背筋を走る。

「ん……」

思いがけずこぼれた声が予想外に甘く恥ずかしい。

（なんだ、これは……）

内心で動揺するサラに構わぬまま、冷たい手が首筋をなでおりていった。

「あっ……」

冷たい手に触れられるたび、いちいち反応して身体がびくりと震えてしまう。恥ずかしくて目をつぶると、先ほどより荒いエルナンの息づかいが聞こえた。

「はぁ……サラ……まさかこんな……」

呼吸の合間に聞こえる声がわずかに上ずっている。
（エルナンも興奮しているのか？）
サラはこれまで恋愛ごとには無縁で、ひたすら騎士として精進してきた。もちろん異性からこんなふうに触れられた経験などない。甘い響きで名を呼ばれ、首をそっとなでられる。たったそれだけなのに、なんだか身体の奥に火が灯ったようで胸の奥がザワザワと落ち着かなかった。
エルナンがサラの手を取り、今度は指先に口づけを落とした。鍛錬で硬くなった指先では美しい唇を傷つけてしまいそうであわてて手を引く。
「照れてるのか？　かわいい」
「えっ!?　いや、えっ？」
かわいいと言われ驚いて目を開けると、目の前には厳しい顔をした氷人形のようなエルナンがいた。
（あれ？　聞き間違えた？）
興奮した様子でかわいいと言われた気がしたが、エルナンの表情はなにひとつ変わっていない。サラが混乱していると彼が口を開いた。
「サラ、あなたを愛している」
「ひぇっ！」
いくら演技でも、さすがに「愛している」はやりすぎだ。頬に一気に熱がたまり、おそらく髪色に負けないくらい真っ赤になっていることだろう。
「いや、あの……」



しかし見上げるエルナンの顔は氷人形のままで、与えられる甘い言葉とはまるでちぐはぐだった。
（なんだこれは）
さすがのサラも初めての男女の行為を前に緊張している。予想外の甘い言葉をかけられればそれだけでも動揺するのに、言葉とは裏腹の冷え切った目で見られては心の置き所をどこに持っていけばいいかわからない。
（演技ならば言葉通りの甘い表情を浮かべ、せめてひとときの夢として騙し通してくれればいいものを）
それか表情通りに、甘い言葉のひとつもなしに無理矢理進めてもらった方がマシかもしれない。サラは仕切り直しをしようと提案するため、一度行為を止めようとする。
「エルナン、ちょっと待っ……んん！」
しかし「待って」の一言が、エルナンの唇によって遮られる。
（これは……キス？）
昼間の結婚式で軽く頬にされたが、唇を合わせる口づけは初めてだ。触れた唇はやっぱり少し冷たい。口づけをしながら冷たい銀の目がのぞき込んできて、怖気づいている心まで見透かされそうで、サラはギュッと目をつぶった。
エルナンは味わうように何度も唇を重ね合わせた。その間もずっと冷たい手がサラの輪郭を確かめるように頬や首筋をゆっくりなぞっていく。寒さとは違う理由でサラの身体は細かく震えた。
最初は冷たかったエルナンの唇が、サラの熱を得て徐々に同じ温度になっていく。キスの合間に吐

く息まで重なって、唇から溶けて混ざり合ってしまいそうだ。
ふいにエルナンの舌が口の中に入ってきた。
「な……ん……っ!!」
口いっぱいに入ってきたエルナンの舌を苦しいと感じるのに、なぜかこれまで感じたことのないような快感に襲われた。
（あぁ、なにこれ、すごい……）
知識として、これが深い口づけだということは知っている。だがただ舌を絡めるだけで、こんな身体中から力が抜けてお腹の奥が疼くようなものだとは知らなかった。甘い快感がびりびりと全身に広がり、まるで自分の身体ではないみたいだ。
「ん……エルナ……」
サラが深い口づけに夢中になっていると、いつの間にかエルナンの手が首からさらに下へと移動した。冷たい手がふんわりと胸を包みこむ。
「あっ！」
サラよりも大きくて硬い手が柔らかい胸に沈み込む。身に着けているのは初夜の花嫁用のナイトドレス一枚で、薄い布の下は裸だ。薄い布越しに、エルナンの手のひらの感触がありありと伝わった。羞恥のあまり身体中が熱を持ち、その分触れる手を冷たく感じて心地よい。胸の先がじんと痺れて硬くなり、手のひらや布とこすれて甘い刺激を生んだ。
エルナンはサラの胸の柔らかさを確かめるように、慎重に揉みしだいた。触れる手つきとは裏腹に、



聞こえる呼吸が荒い。
（男の人は……エルナンは……大きい胸が好き……？）
混乱しながらも、大きい胸を喜ぶ騎士連中の声を思い浮かべる。サラの胸は人より大きめで、騎士の頃は邪魔にならないよう強く押さえていたが、もし喜んでくれているのなら嬉しい。確かめたくて薄目を開けると、そこにあったのはやはり氷人形のままのエルナンの顔だった。
「え……」
目の前の男は、なんの感情も示さない顔で淡々と胸を揉んでいる。サラは頭から冷や水を浴びせられた心地がした。
（これでは、私ばかりが行為に溺れているみたいだ！）
いたたまれなくなってふいと顔を横に逸らすと、耳にかぶりつかれた。
「えっ？」
義務感でサラを抱いているはずなのに、耳元から聞こえる息遣いは熱く乱れている。
「あぁ……サラ……サラ……好きだ……」
わずかにかすれた声はそれだけ聞けば興奮してサラに夢中になっているようで、しかし顔を見れば冷たい氷人形。聞こえてくるものと目に映るものがまるで違って、サラは混乱が抑えきれなくなった。ただでさえ初めて感じる快感に戸惑っているのに、どんどん冷静さが失われていく。
「サラ……サラ……」
「エルナン……ちょっと待っ……んっ、あぁっ！」



耳元で熱く名を呼ばれながら身体を弄られ、自分の意思とは裏腹にどんどん昂っていく。エルナンは冷静なのに、自分だけが平常心を失っていることがひどく悔しい。だが与えられる快感からは逃れられず、目の前が真っ白に弾けた。

「あ……も……なにこれ……」

頭の中がぼんやりとして、身体が思うように動かない。まるで自分の身体ではないようだ。サラがなにもわからないでいるうちに、エルナンは行為をどんどん進めていった。身体中を弄られ、なでられ、揉まれ、なめられる。そして中を解されて何度も高められたあと、気づいたらエルナンの分身がサラの奥深くに沈められていた。痛いのなんて一瞬で、すぐに強い快感がサラを支配する。

「あっ、あっ、エルナン……お願い、待って！」

「あぁ、サラ……あなたの中は最高だ……」

少しでいいから冷静になる時間が欲しいのに、エルナンが止まってくれない。ひどく熱い塊がサラの閉じた中を押し広げ、快感の波が幾重にも重なって押し寄せてくる。初めて感じる快感は強烈で、他のことはなにも考えられなかった。

「あぁん！　あんっ、はっ、あぁ……」

エルナンが腰を揺らし、擦れ合ったところから痺れるような快感が広がる。奥を突かれるたび、口からは大きな嬌声が漏れて止められない。一度止まって欲しくてエルナンを見上げると、銀色の目が冷たくサラを見下ろしていた。

「あっ……え……？」

目をつぶれば愛されているようなのに、目を開ければ氷人形が見下ろしている。その落差にサラはひどく混乱した。戸惑っていると熱い杭が奥まで押し込まれ、激しい快感に襲われた。

「や……待って……止ま……あぁっ」

あっという間に混乱と快感の渦にのみ込まれ、わけがわからないまま裸の背にしがみつく。何度も高みまで押し上げられ、ようやくエルナンが動きを止めた。サラの中をかき回していたものがずるりと出ていく。

（は……終わった……？）

長かったのか短かったのか、痛いのか気持ちいいのか、嬉しいのか悲しいのか、すべてがよくわからない。ただ行為は終わり、二人は名実共に夫婦になったのだった。

シーツの上で動けないまま、疲れ果てた身体と頭でサラはぼんやりと考えていた。

（一体どうしてこんなことに……）

冷たい身体のままサラを抱きしめて眠るエルナンの顔は相変わらず無表情で、サラは夫の顔をながめながら二人の結婚の経緯を思い出していた。



# 第一章　突然の見合い

サラの生家であるガルシア子爵家は、ヴァスチア王国で古くから続く武の名門だ。遥か昔の先祖が武功を立てて爵位を賜り、それ以来ヴァスチア王家に忠誠を誓っている。

当代のガルシア子爵家もそろって騎士を務めており、父であるガルシア子爵は王立騎士団の総団長、長兄アーサーは第一騎士団団長、次兄ルイスはディル王太子直下の近衛騎士、そしてサラはローズマリー王女の護衛騎士である。そんな騎士一家のガルシア家に、ある日縁談が舞い込んだ。

「見合い……ですか？　私が？」

「あぁ」

父であるガルシア子爵の執務室に呼び出されたサラは、同席していた長兄アーサーから見合いの話を切り出される。

「サラにはまだ早い！」

ゴリラと見まがう巨漢で強面のガルシア子爵が吠え、びりびりと空気が震える。ぐるぐると唸る様子は猛獣さながらで、気の弱い令嬢なら気を失っていただろう。もちろんサラは気の弱い令嬢ではないのでどこ吹く風だ。

「父上。サラももう二十四ですよ。全然早くありません」

「ちょっと、アーサー兄さま！　私は結婚する気ありません。お父さま、いつものように断ってくだ

さい」
　ガルシア子爵は愛する妻の忘れ形見であるサラを溺愛しており、叶えられる願い事ならなんでも聞いてくれる。しかし今回ばかりは執務机に肘をつき、両手を組んでむむむと唸り声をあげるばかりだった。
「うーむ」
「唸ってないでなんとか言ってください、お父さま」
「断れるもんなら、俺だってとっくに断っている!!」
　ガルシア子爵は頭を抱え、ごんと執務机に額を打ち付けた。執務机のぶ厚い天板がミシと嫌な音を立てる。子爵の石頭では本当に机が割れてしまうかもしれない。
「断れないってどういう意味ですか？」
「俺だって断りたいんだ、サラ！」
「だからどういう意味か説明してください。お父さま！」
「おまえは一生結婚なんてしなくていい！」
　泣きそうな顔をしてまるで会話にならない父親を問い詰めていると、アーサーがこめかみに手を当ててため息をついた。
「はぁ……父上は少し黙っていてください。サラ、おまえもだ」
　アーサーの容貌は父親をそのまま若くしたような強面のゴリラだが、こちらは苦労人よろしく眉間に深いシワが刻まれている。母を早くに亡くしたガルシア家で、猛獣のような父や弟妹たちの手綱を



取っているのはこのアーサーだった。
「アーサー兄さま、でも」
「今回の見合いは父上でも断れない。あきらめろ、サラ」
「なぜですか！　私の主人はローズマリー王女殿下です。私は王女殿下の護衛として一生を捧げるつもりで忠誠を誓いました」
「サラ、一生騎士でいるのは無理だぞ」
　子どもを諭すような言い方に、ムッと口を尖らせる。それくらいサラだって知っている。いつかは身体が衰えて騎士を引退しなければならない日が来ることくらいわかっているが、でもそれは今じゃない。
「それぐらいの心づもりだということです！　お父様から断れないのなら、王女殿下に頼んで断ってもらいます」
　ローズマリー王女はサラをとても気に入っているので、頼めば縁談のひとつやふたつくらい断ってくれるだろう。
「おまえなぁ……。そんなことで王女殿下の手を煩わせるな」
「そんなことなんかじゃありません！」
「会ってみたら気に入るかもしれないだろ」
「まさか！」
　別にサラだって結婚が嫌なわけじゃない。それに父と母が深く愛し合っていたことを聞いて育って

いるので、想い想われる夫婦というものにあこがれはある。ただそれ以上に、騎士を続けたい気持ちの方が大きいだけだ。貴族の令嬢として結婚すれば子を産むことが求められ、子を授かれば騎士を続けることはできない。そのため結婚をあきらめたのである。

執務机に突っ伏していたガルシア子爵が顔を上げ、はぁーっとひときわ大きなため息をついた。

「だが、王女殿下でも断れるかどうか……」

「お父さま、それはどういう意味ですか？　王女殿下でも断れないとは、一体誰との見合いなんですか？」

これまでも王家の覚えがめでたい武の名門ガルシア家と縁づきたい家から、サラを嫁にと求める声はいくつもあった。しかし騎士を続けたいというサラの希望を優先して、ガルシア子爵は娘に結婚を無理強いしてこなかったのである。

それなのに今回だけ断れないというのもおかしな話だ。一体どんな相手なのかと、サラの胸に一抹の不安が押し寄せる。戸惑うように視線をさ迷わせるとアーサーと目が合い、彼はやれやれと肩をすくめてみせた。

「それはな、この結婚が王命だからだよ。たとえローズマリー王女殿下の頼みでも覆ることはない」

「私の結婚が王命!?」

アーサーは執務机に近づくと、一枚の書状を取り上げ「ほら」と見せてよこした。それはサラの結婚を命じる書状で、そこにはしっかりとヴァスチア国王陛下直筆のサインが書かれていた。



✦ ✦ ✦

いくら王家の覚えがめでたくともいち子爵令嬢が王命に背けるはずがなく、サラは渋々見合いを了承した。元より拒否権など無いのである。

そして迎えた見合い当日、サラは護衛騎士の制服に身を包んでいた。着替えを手伝った侍女が心配そうに顔を曇らせる。

「お嬢さま、本当にこの格好でよろしいのですか？」

「もちろん。似合ってないかな？」

「まさか！　お嬢さまほど騎士の格好が似合う方はいらっしゃいません」

「でしょう？」

サラが笑いかけると、侍女がほんのり頬を赤らめる。ゴリラによく似た父親やアーサーと違って、サラは亡き母親に似て優美な顔立ちだった。父親に似たのはガルシア家特有の燃えるような赤い髪と、男性にも引けを取らない身長くらいだ。

とはいえ、鍛えられた締まった身体では最近の流行りであるパニエたっぷりのドレスはまるで似合わないし、華やかな化粧をして舞踏会に参加したら友人たちに「女装しているみたい」と笑われる始末である。一方で騎士服を着たサラがほほえめば、至る所で女性たちの黄色い歓声が上がるほどだ。騎士服の方がよっぽど似合っている。

すると部屋に入ってきたアーサーが、サラを見て眉間にシワを寄せた。サラはぱっと両手で耳を塞

ぐ。
「サラ！　なんだその格好は！」
「アーサー兄さま。なんだと言われましても、騎士の正装ですが？」
「そんな格好では相手に失礼だろう。早く着替えなさい」
「すみません。これまで社交の必要がなく、ドレスを持っていなくて」
「そんなわけないだろう！」
アーサーのこめかみがぴくぴくと震えている。さすがのサラもドレスの一枚や二枚は持っている。しかしここはあえての騎士服で『こちらから断れないなら向こうから断らせてやろう』作戦だ。
（見合いに騎士服で来るような女は、向こうも嫌がるだろう）
さらに小言を言おうするアーサーの後ろから、ひょいと背の高い赤髪の男が顔を出した。
「おう、サラ。ずいぶん勇ましい格好だな」
「ルイス兄さま！　今日はどうしてここに？」
サラとよく似た母親似の優美な笑顔を浮かべるのは、次兄のルイスだ。ルイスは腕っぷしの強さと顔の良さから近衛騎士に抜擢され、普段はディル王太子の居住地近くに部屋を与えられている。そのためガルシア家の屋敷で会うのは久しぶりだ。
「もちろん、我が家のかわいいお姫さまのことを心配してさ」
「お姫さまなんて、そんな」
「サラはいつだって我が家のお姫さまだろ」



サラが駆け寄ると、ルイスが妹の頭をなでる。サラ同様若い女性からの視線をほしいままにしているルイスは、父親に負けず劣らず妹を溺愛する兄だった。
「おい、ルイス。俺の話はまだ終わってないぞ」
「まあまあ、兄上。サラを怒らないでやってよ」
「そうですよ。どうせドレスを着たって中身は私ですよ？　最初に騎士の私を見てもらった方が、わかりやすくていいじゃないですか」
「それはそうだが……。むむ、今から着替えていたら見合いに間に合わなくなるか。仕方ない。父上、サラが無茶をしないようにちゃんと止めてくださいね」
いつも口うるさいアーサーだが、彼もまた妹を溺愛していることに変わりはなかった。もしこれで難癖をつけてくるような相手なら、あらゆる手を使って破談にしてくれるだろう。
「いっそ、行かなくてもいいんじゃないか……」
兄たちのあとから部屋に入ってきたガルシア子爵が、往生際の悪いことをつぶやきアーサーににらまれる。
「父上は王命に逆らうおつもりですか？」
「うぐ……」
ガルシア家は、王家への忠誠心が高いことでよく知られている。もちろん当代のガルシア子爵も、国王陛下をはじめとする王家に逆らう気などみじんもない。子爵は王家への忠誠と我が子への愛情の間でなんとも複雑な表情を浮かべた。

サラは自分の見合い話が父親を悩ませていることに胸が痛んだ。もしこれがサラの希望する相手との結婚ならば、子爵は血の涙を流しながらも喜び認めてくれただろう。しかし本人が嫌がっている見合いである。子爵も本心では、破談になって欲しいと願っているのは明らかだった。

（本当にやっかいな話を持ってこられたものだ）

サラが眉間にシワを寄せると、ルイスが笑いながら背中をポンと叩いた。

「勇敢なお姫さま。せめて剣は置いていけよ。さすがに人殺しは困る」

「もう！　ルイス兄さま、そんなことするわけないでしょう！」

二人で軽口を叩いていると、アーサーがやれやれと肩をすくめる。

「相手はウィズ伯爵だ。そう簡単にはやられないだろうな」

「ウィズ伯爵!?　ってことは、サラの見合い相手はあの氷人形のエルナンか」

「おい、口を慎め。相手は伯爵だぞ」

「ルイス兄さまはウィズ伯爵のことを知っているのですか？」

「あぁ、魔術士は国王陛下の直属だからな。近衛の俺たちとはよく顔を合わせるし、訓練で手合わせをお願いすることもある」

サラの見合い相手であるウィズ伯爵は、氷人形と呼ばれる魔術士のエルナンだった。魔術士はすべて合わせても国に二十人といない貴重な人々で、みな常人には計り知れない能力を持っている。その中でもエルナンは桁外れの能力を持つ魔術士として有名だった。

「はは。おまえらが戦ったら屋敷が吹き飛ぶんじゃないか？」



「ルイス、笑えない冗談はやめてくれ。サラも変なことを考えるなよ。ウィズ伯爵に手を出したら、無傷じゃすまないぞ」

「へぇ、私の見合い相手はそんなに強いんですか」

強いと聞いてサラが興味を示すと、アーサーが大きく顔をしかめる。この妹が強い相手との手合わせをしたがる性質（たち）なことを思い出したようだ。

アーサーが管理する第一騎士団と魔術士は協力して任務にあたることが多いため、エルナンの強さをよく見知っているアーサーは「くれぐれも怒らせるなよ」と何度も口にした。

（ウィズ伯爵が能力をいくつも持っているという噂は本当かな？）

魔術士は通常ひとつだけ特別な能力を持っているものだが、エルナンは複数の能力を持っているという噂だった。

かつての戦乱の世の中では、魔術士の数の差が戦いの勝敗を分けたと言われていた。さらに普通なら一代限りの魔術士爵を与えられるところを、エルナンは特別に伯爵位を与えられている。

（それだけ魔術士として優秀ということか。いったいどれだけの強さなのかな？）

サラは騎士として、純粋にエルナンの強さに興味を引かれた。

（しかし、なんでそんな相手と結婚させられるんだ？）

恋愛結婚が主流の昨今、王命で結婚させられるなど珍しい話だが、その答えはガルシア子爵にも知らされていなかった。

（ウィズ伯爵に直接尋ねたらわかるのかな？）

見合いの時間が近づき、兄二人に見送られながらガルシア子爵と共に家を出る。愛馬に乗り見合いの場へと向かう道中、子爵が馬を寄せこっそり声をかけた。
「サラ。どうしても嫌ならそう言え。俺がなんとかしてやる」
「はい。ありがとうございます」
馬上の子爵は強面をしかめて、恐ろしい形相をしている。サラが「どうしても」と頼み込めば国王にまで逆らいかねず、わがままを言って困らせたくなかった。父や兄たちに溺愛されるだけでなく、サラもちゃんと彼らを大切に想っているのである。
（やはり向こうから断ってもらいたいものだな）
サラは失礼にならない範囲で結婚を破談にできる方法がないか頭を巡らせるのだった。

本日の見合いはシド公爵邸で行われる。
シド公爵は国王から魔術士の管理を任せられており、いわば魔術士たちの長のようなものだ。魔術士は国王の管理下でどこの組織にも所属していないが、その実態はシド公爵が全権を握っていて国王でも簡単には動かせない。かといって、シド公爵が国王の許可なしに魔術士たちを動かせるわけではない。常人にはない力を持つ魔術士の動きは国への影響が大きく、互いに監視するための仕組みができていた。
また魔術士は大変貴重で、素質がある者は早々に国に保護される。エルナンも幼い頃に国に保護され、それ以来シド公爵が後見人として親代わりをしていたそうだ。



（シド公爵はどういう方なのだろう。あまり人前に出られないと聞いているが）
魔術士についての情報は国に厳しく管理されており、サラが知っていることはとても少ない。シド公爵があまり人前に出ないのも、おそらく魔術士のことを不用意に広めないためだろう。
（魔術士は人の血を啜るだとか、月を見ると怪物に変身するだとか、人々は好きなように噂しているが）
サラ自身は魔術士と一緒に任務にあたったことはないが、騎士の知り合いには何人も魔術士と共に任務を行った者がいる。わざわざ詳しく尋ねなくとも、これらの噂が嘘なことぐらいはわかる。とはいえ、少しばかり好奇心が刺激された。
（見合いは気が乗らないが、魔術士に会うのは少しだけ楽しみだな）
シド公爵邸が見えてくると、屋敷の中から一人の男性が出てきた。
（あれは……ウィズ伯爵？）
日の光を受けて銀色の髪がきらりと光っている。姿絵の何倍も整った顔立ちで、あんなに美しい人がこの世に二人もいるわけがない。
（わざわざ出迎えか？　いや、それにしては様子がおかしいぞ）
すぐにもう一人、黒髪の紳士が屋敷から出てきてエルナンの腕をつかんだ。
「エ……！　……！　……!!」
「……」
「……！」



声までは聞こえないが、なにやら二人が揉めている。
「お父さま、なにかあったんでしょうか？」
「わからん」
このまま見合いが中止にならないかとながめていると、エルナンがサラたちに気がつき近づいてくる。間近で見るエルナンはたいそう美しい顔をしていたが、表情からはなんの感情も感じ取れず、まるで人形のようだった。
（これが氷人形エルナン……）
彼の二つ名を思い出しながら、サラは馬上から見惚れてしまう。芸術に対する素養はあまりないが、このままどこかの美術館に飾られていてもおかしくはない。
「ガルシア子爵令嬢」
「あ、はい」
芸術品に声をかけられ、正気を取り戻したサラがあわてて馬から降りる。するとエルナンは、にこりともしないまま信じられない言葉を口にした。
「任務があるので、これで失礼します」
「え？」
「では」
エルナンの身体は銀色の光に包まれ、その場からシュンと姿が消えた。
「え!?」

サラはぽかんと口を開けたまま、エルナンのいた場所をじっと見つめる。魔術士が空を飛べたり、一瞬で移動できたりするという噂は本当だったらしい。

（まさか、目の前でいきなり人が消えるとはな）

初めて目の当たりにする魔術に驚いていると、すぐ近くでぐるると猛獣の唸り声のようなものが聞こえた。ふり返ると、ガルシア子爵が怒りで顔を真っ赤にしている。

「あ！」

そこでようやく、サラは自分が見合いをすっぽかされたことに気がついた。

「お父さま、落ち着いてください」

鼻息を荒くするガルシア子爵をなだめていたら、黒髪の紳士が近づいてくる。

「わざわざ来ていただいたのに、誠に申し訳ない」

黒髪の紳士はシド公爵と名乗り、苦虫を噛み潰したような顔をした。どうやらウィズ伯爵もこの見合いに乗り気ではなかったらしい。

（この調子なら、ウィズ伯爵の方から見合いを断ってくれそうだな）

ウィズ伯爵とシド公爵からの要請ならたとえ王命だろうと断れるはずだと目論んで、サラは内心でほくそ笑む。結局、顔合わせらしい顔合わせもないまま見合いは終わり、サラは見合いが失敗に終わったことを喜んだのだった。

しかし後に、サラはこの見積もりが甘すぎたことを後悔する。その後いくら待っても破談の連絡がこなかったのだ。かといって見合いの仕切り直しもなければ、エルナンから手紙のひとつも送られてこない。もちろん手紙が来ないので、二人で会うこともなかった。

自分から問い詰めるのもしゃくで放っておいたら知らないうちに国王主導で結婚式の準備が着々と進められ、気づけば二人は結婚することになっていた。



✦ ✦ ✦

エルナンとの初夜を終えた翌朝、サラはいつもの習慣通り早朝に目を覚ました。隣で寝ている夫はまだ起きる気配がなく、相変わらず芸術品のような顔をしている。

（あ、まつげが長い）

長い銀色のまつげが、朝の光を浴び頬に影を落とす。結婚式ではベール越しであり、寝室は薄暗かったため、目の色をまだちゃんと見ていない。昨晩サラを見下ろした銀色は、わずかな灯りで揺らめいて恐ろしいほど美しかった。どうやら美しすぎるものを見ると、人は畏敬の念を覚えるらしい。

（せっかくなら明るい所で見てみたいな）

エルナンが目を覚まさないかとしばし見つめているうちに、サラは猛烈な恥ずかしさに襲われた。

（うう、あんなに乱れて……。初めては痛いものじゃなかったのか？）

経験済みの友人たちから話を聞いていたので、ある程度の痛みは覚悟していた。ただ、騎士として痛みには強い方だから大丈夫だろうと軽く考えていた。

（まさか、あんなに気持ちがいいなんて）

痛みならまだ我慢できるが、強烈な快感ではそうもいかないらしい。初めての夫婦の行為は気持ちが良すぎて、途中からわけがわからなくなってしまった。あれほどの快感が得られるから、男性騎士たちはこぞって女性を抱きたがるのだろうか。

（それとも、もしかして私が淫乱なのか……？）

自分の身体は性的な刺激に弱いのかもしれない。そんな事実は知りたくなかったと、サラは頭を抱えた。

（それに比べて、エルナンはずっと冷静だったな）

甘い言葉を口にしながらも表情を変えず、銀色の目はサラの様子をひとつも見逃さないようにずっと観察していた。これまで聞きかじった閨の知識によれば、おそらく昨晩はとても丁寧に抱いてくれたのだろう。

（エルナンに感謝しないといけないな）

無表情から繰り出される甘い言葉に動揺して、いっそ表情通り無理矢理進めてくれなんて考えてしまったが、今ふり返れば慣れない行為に混乱していたことがよくわかる。

（あんなに乱れて……それに、快感に溺れて我を忘れるなんて騎士失格だ。次こそは私だってもう少し冷静に…っていや、次なんてあるのか？）

夫婦の行為をまた行うつもりの自分に気づいて、サラが苦笑する。初夜を完遂して義務は果たしたのだから、次があるかなんてわからない。

（エルナンが子を望むならばすぐにでも次があるかもしれないが、さすがにそこは話し合う必要があるな）

爽やかな朝だというのに、どうも夫婦の行為についてばかり考えてしまう。これ以上ベッドにいては、昨晩の具体的な行為までありありと思い出しそうだ。

「あぁ、もう。起きよう」

身体の奥のかすかな疼きを無視して、サラはベッドから抜け出した。普段の鍛錬とは違う身体の使い方をしたせいかあちこちに違和感があるが、動けないというほどではない。ただ、足の間というか身体の中に、まだなにか入っているような気がする。

「んっ、はぁ……。少し、身体を動かすか」

サラは、嫁入り道具に持ってきた訓練用の木剣を手に取った。

ガルシア子爵家の屋敷とは違い、ウィズ伯爵家の屋敷には鍛錬用の場などない。代わりに庭の一部を借りて鍛錬を行うことにする。

軽く準備運動をしてから木剣を振る。木剣がビュンと空気を斬るたびに、淫らな煩悩が消えていく。

（さて、どうするか……）

これでサラは処女（おとめ）ではなくなったわけだが、離婚して再婚する予定もないので特に問題はない。

（どうせ今すぐ離婚するのは無理だしな）

すぐに離婚できるようなら、結婚する前に破談にできている。白い結婚を続けて離婚を認めてもらう方法もあったが、王命に逆らったとして咎められる可能性だってあった。そのためサラは、はなか

ら白い結婚に固執する気はなかったのである。
ビュン、ビュンと剣を振りながら、頭の中を整理する。
（とりあえず、夫婦の体裁が整えられたことを喜ぶとするか。なにかあった時に、咎められるのが私だけとは限らないからな）
まだ見えない敵の姿を思い浮かべながら、サラはビュンと剣を振り下ろした。
結婚式では、父と兄二人がそれぞれ「帰ってきたくなったら、いつでも帰ってこい」と言ってくれた。ガルシア家は先祖代々王家への忠誠心が高く、それはサラを含め父も兄も皆同じである。
しかし、それでも末妹の幸せを願っていざとなったら王命だろうと背く決意をしてくれた。もしサラの結婚問題で王に咎められたら、ガルシア家の皆は騎士の職を失うだけでなく爵位の返上を求められるかもしれない。
（私のわがままで皆を不幸にしたくない。そのためなら、純潔を失うことくらいどうということはない）
サラは自分が父にも兄にも大切にされていることを、十分に知っている。だからこそ、彼らに迷惑をかけたくなかった。
（本当に無理なら出て行けばいい。でも、ひとまずはこの結婚生活を前向きに考えてみるか）
幸いエルナンのことは嫌いではない。見合いをすっぽかされはしたが、こちらだって騎士服で無礼を働こうとしたのだから文句は言えない。
（むしろ同じ思いを抱えた者として、わかりあえないだろうか）



好きでもない女性との結婚を命じられ、それでも彼は前向きに夫婦になろうとしてくれている。うまくやれる可能性だってあるはずだ。
ただ、常に無表情でなにを考えているかわからないところが気にかかる。サラはエルナンの本心を確かめるまでは、警戒を解かないでおこうと決めた。
（そんなことより、騎士を辞めさせられたことを私はまだ納得していないぞ！）
襲いくる敵を切り倒す要領で、ビュンビュンと木剣で空を斬る。
サラにとっては、結婚よりもよっぽど騎士を辞めさせられたことの方が大事だった。元々女性騎士の数は少ない上に、男性騎士と違って結婚や妊娠、出産を機に辞めなければならない。
しかし女性の王族や貴族令嬢の護衛として女性騎士を必要とすることは多く、まったく数が足りていないのが現状だ。だからこそサラは、自分の身体が動くうちは騎士を続ける心づもりだったのである。
「ハァッ!!」
気合いの声を上げながら敵の急所を刺し貫くイメージで、ビュンと剣を前に突いた。
王命婚には従ったが、子を産む気はまだない。昨晩の初夜も念のため避妊薬を飲んでいる。サラは騎士に戻ることをまだあきらめていなかった。
（さて、この結婚はいったい誰の思惑だ？）
サラの結婚の経緯はいささか強引すぎた。忠誠心の強いガルシア家だから命令を受け入れたが、恋愛結婚が主流の今では反発必至である。